

オリンピック・パラリンピック一体のレガシー

スポーツを通じて共生社会を

公開シンポジウム



2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて、開催の意義や社会のあり方などについて考えるスポーツ研究所(佐藤雅幸所長)公開シンポジウム「オリンピック・パラリンピック一体のレガシー」が11月11日、生田キャンパスで行われた。

「スポーツを通じて誰もが共に生きる、理解できる社会になってほしい」とのメッセージに、聴講した約300人の学生らからは「5年後の東京五輪・パラリンピックに携わってみたい」と関心を高めていた。

大阪体育大学客員教授で長年障がい者スポーツ指導に携わってきた高橋明氏が講演。パラリンピックの歴史を振り返るとともに、創始者の「失った機能を数えるな、残った機能を最大限に活かすパネリスト

さらにパラリンピックという言葉は日本発祥と紹介し、「言葉は知っていても、観たことある人は5%弱。5年後はしっかり観てと呼び掛けた。パネルディスカッションは高橋氏に加え、日本パラリンピアンズ協会会長の河合純一氏と李宇諤法学部准教授(アトランタ五輪サッカー韓国代表)が登場。

競泳選手として1992年から6大会連続でパラリンピックに出場し、金メダル5個を含む計21個のメダルを獲得した河合氏は「障がい者も高齢

者も誰もが安心して暮らす社会をつくるための投資が求められている。パラリンピックに向けて、今そのチャンスが訪れているのではないかと問うた。

雇用に関して高橋氏は「企業が選手のバックアップをしてくれるようになってきた。スポーツを

通してハンディキャップについて考えてもらえれば、障がいのある人の社会参加がしやすくなる」と述べた。ブライインドサッカーの研究を進める李准教授は選手育成システム的重要性を指摘した。

卒業で障がい者スポーツを取り上げているという小嶋智樹さん(経営

4)は「5年後の東京五輪・パラリンピックに関わりたくないという気持ちが強くなった」と語り、佐々木望さん(文工)は「できた時の喜びについて高橋氏が語っていたが、スポーツで周囲の支えは大事」と真剣な表情で聴き入っていた。

たわっていることが分かった」と話した。

5回の講演を終えマン教授は「質疑応答の時間が最も印象的だった。講演会に来てくれる方々の興味、経験、物の考え方を学ぶ良い機会となった」と話した。

2001年から毎年のように来日しているリム教授の講演は人気が高く、常連の聴講者が会場に詰め掛ける。ニュージラードとアジアの経済をテーマに、11月7日は「相對所得と幸福度：高齢者のケース」を講演した。

会場は40人以上が参加し満席となった。講演の途中から質疑応答が行われ、聴衆が考える双方向講演が展開された。

本学での初登壇となったホイヤ教授は「米国の経済を学ぶ」を統一テーマに、自身の研究テーマでもあるエネルギー問題について講演した。

好評！ 国際交流特別講演会

すべて英語で学ぶ 宗教学や社会経済

講演から質疑応答まですべて英語で行われる国際交流センター主催の特別講演会が、国際交流協会から3人の講師を迎え生田キャンパス国際交流会館で行われた。一講師が5回シリーズで展開。話題性のあるテーマを設定し関心の高い経済、経営、社会問題に切

り込み、学生や市民に好評だ。

講師は▽ジェフリー・マン教授(米サスケハナ大学、9・10月)▽スティーブン・リム教授(ニュージラード・ウィカト大学、10・12月)▽マーク・ホイヤ教授(米サスケハナ大学、

マン教授の専門は宗教学。10月17日の講演は「現代アメリカ政治における宗教」で中絶、同性婚、安楽死などをテーマに社会と宗教との関わりを語った(上面に写真)。

参加した新村知香さん(ネット情報4)は「内容が難しいと感じたが分かりやすい英語だった。アメリカでは複雑な社会問題の根底に宗教観が横

た」と仲川教授。依頼を受けて10枚出品した中から採用された作品。全国の郵便局などで110万枚が発売されている。

1月13日(水)から22日(金)まで東京都千代田区竹橋、パレスサイドビルのアートサロン毎日で開催される「申年干支切手揮毫作家展」(毎日書道会主催)で、切手作品のほか数点が展示される予定(土・日休館)。

仲川教授の書 申年の切手に



2016年の干支・申(馬)の「申」の写真を。きりてとしたたすまいから新しい年を伝えようとして、さまざまな書体で表した切手「申」が好評発売中だ。

「落ち着いたよき年に

書の魅力をパリで発信

陰と陽を巧みに対比

仲川教授「好風」展示



仲川教授が実行委員長を務めた「書の世界 現代日本の書」(フランス国立ギメ東洋美術館、毎日書道会主催)がパリの同館で開催され、話題を呼んでいる。現代日本を代表する書人の作品42点が展示中だ。

仲川教授の作品は「好風」。淡墨で陰(好)と陽(風)を表し、中央に文字の力を集め、「二つの世界」を巧みに対比させた。「日本の風景を表現した」と仲川教授は語る。会場の正面に掲げられ足を止めるフランス人からは「まるで絵を見るよう」との声が聞かれた。効果的な「じみ」や「かすれ」に、西洋絵画にはない東洋の美を感じ取っていた。開催は1月11日まで。

神奈川建築コンクールで優秀賞に選ばれた国際交流会館



国際交流会館が優秀賞

神奈川建築コンクール 一般建築物部門

専修大学国際交流会館が第59回神奈川建築コンクール一般建築物部門優秀賞に選ばれ、11月17日、表彰式が行われた。

同コンクールは神奈川県と横浜、川崎など12市の主催で、建築文化や建築技術の向上などを目的に毎年開催している。今回は一般建築物、住宅部

国際交流会館は2014年5月完成。建物延長414.0・77平方メートル、4階建て。2人部屋が基本の居室は52室あり、短・長期留学生や寮内留学する本学生ら計102人が暮らせる。ほか外国人客員研究員のゲストルーム、娯楽室、スタディールームを備えている。デザインは和を基調

とし、落ち着いた雰囲気と、落ち着いた雰囲気。今回の受賞は、小規模な居住空間を使い勝手よく、かつ多文化に配慮できるようなユニバーサル性能を持たせている点、住宅地の中に溶け込ませる配慮を丁寧に行っており、特に内部は外部から予測しにくい豊かで洗練された居住空間を実現している点などが評価された。



質問に答えるリム教授

多くの聴講者が来場したホイヤ教授の講演



パリのギメ東洋美術館で、作品の仲川教授(右)、左は島谷弘幸九州国立博物館館長